

(日本国際問題研究所員)

中島嶺雄著『現代中国論』

イデオロギーと政治的内的考察

著者は最近、二、三年来、『思想』、『唯物論研究』、『エコノミスト』などに、中ソ論争およびそれとの関連における現代中国の政治思想に関する論文を発表してきたが、本書は「中ソ論争」という今日もともアクトチュアルな政治課題を重視するなかで、現代中国の政治的・イデオロギー的状况とその背景を分析し、現代中国の再検討を試みようとする」意図のもとに書き下した現代中国の政治思想にかんする批判的研究書である。

中ソ論争が顕在化して以来、日本でもきわめて多くの論文が発表されてきたが、論争がとくに中国にとつてどのような意味をもつかを、総合的な資料の検討という基礎的作業を経て、まとまった形で論じたものがほとんどなかった現状において、本書がある一定の問題意識の上に立って新しい中国論を提起したことは、理論構成の基礎にある著者の視点が妥当なものであるかどうかは別として、今後の活潑な論議を生む一石を投じたものとして注目し値しよう。

本書の構成は三部から成り、第一部「現代中国のイデオロギー」では、まず序章において、今日の中国は、中国革命の勝利の経験をもとに絶対化することを要求し始めており、イデオロギー的硬直によって思想の躍動は停止し、マルクス主義の本来的志向は完全に失われてしまっているため、これを直視することが必要である、とする基本的視点が設定され、「わが国に固有の対中国シンパシー」という非合理的・情緒的モメンタを媒介して中国を見ようとする通念」は是正されねばならない、と著者は述べている。

つぎに第一章「毛沢東思想とマルクス主義」では、著者は「政治的成功の全能と無謬という神話」を徹底的に打破するため、毛沢東思想の形成過程を歴史的に跡づけ、毛沢東が一九二〇年を転機としてわずか一年のうちにマルクス主義者として政治活動を開始したこと、毛沢東の労働同盟の理論の農民主体的特殊性、「毛沢東選集」におけるマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンからの引用回数、分析などから、毛沢東思想はマルクス主義とは異質のものであって、むしろスターリン理論に近いと見る。そして毛沢東思想の絶対化と毛沢東個人崇拜が行なわれていると批判する。第二章「中国のイデオロギーの形成要因」では、中国のイデオロギーの形成要因として、二元論的思考を支えられた経験主義、大衆路線の情緒的支柱となつている道徳主義、共産主義と相容れない過激な民族意識の三つが挙げられている。

ることが不可能になったと述べる。第四章「百花齊放・百家争鳴」運動と反右派闘争」は、従来十分な説明がなされていなかった問題であるが、著者は「百花齊放・百家争鳴」運動から反右派闘争に転じた過程の分析を通じて、中国には「人民内部の自由」すなわち社会主義的自由の育つ基礎がないため、「百花齊放・百家争鳴」運動が党批判として激発すると「人民内部の批判」は国家権力への挑戦とみなされて駆逐されていったと見る。第五章「転換期中国の政治過程」では、五八年の「大躍進」期に焦点を置いて、「穩歩前進」から「大躍進」への転換の内的要因を、農業生産の停滞的傾向のほか、①高崗・饒漱石事件、②胡風事件、③農業集団化したがって社会主義建設の基本方針をめぐる党内対立、にあったとし、さらに「大躍進」、人民公社の挫折が対ソ批判を強める結果となったとされる。

第三部「マルクス主義の現代的条件と中国」は、中ソ論争と直接関連のある、中国共産党の主要な傾向を批判検討したものである。

第六章「中ソ論争と中国」では、著者は、中国が「一見、革命的言辭を弄しながら、マルクス主義を偏狭なナンセンスとセクト的教条の病理によって変質させようとする、そのイデオロギー的基礎にたいしては、これを徹底的に清算し得る理論的・思想的反撃がいかなる政治的決着にもまして必要になっていない」と述べて、中国批判を展開する。第七章「現代世界と毛沢東理論」では、中国側見解の核心をなす毛沢東理論が現代世界変革のための普遍的な理論的表現となり得ないことを、①戦争と平和の問題、②「中間地帯」論する。

以上、内容を要約したが、本書に一貫して流れているのは、毛沢東思想なしに中国イデオロギーに對する全面的批判の態度である。第四章を除く各章について、著者が性急に展開する論理はその基本において説得力に欠けるものが多い。とくに第一部と第三部における中国批判の視点は、客観的に中国の政治思想を理解しようとする学問的態度が脱落しており、そ

のため引用資料が十分に生かされていない。次に疑問点を挙げる。著者は、戦争と平和の問題に関する中国の立場を、戦争不可避論であるとして簡単に割り切っている(二五四―二五七ページ)が、そうであるうか。中ソの見解を先入観なく検討すれば明らかとなるように、中国が主張しているのは、帝國主義が存在する限り戦争の根源はなくなり、しかし戦争は防くことは可能である、という主張と基本的には一致すると考えられるのである。また著者は、中国の大家をどのようなものとして把握しているのだろうか。著者は一方では、中国の大家の思想状況を批判して、「真に自覚的・能動的な個人としてその全体を構成」しておらず、画一的な意識しか持たず、かつ「自らの思考を意欲しようにとしない大衆」(七四―七五ページ)として捉えながら、他方では「百花齊放・百家争鳴」期の党批判の激発に際して「中国共産党は、中国革命の担い手としての自己に對する広範な信頼と大衆的支持と

げられている。第二部「転換期中国の政治とイデオロギー」は、中ソ論争のなかにも全面的に投影されている現代中国の総路線の形成過程を、一九五六年から一九五九年までのいわば「転換期」のなかで段階を追って実証的に分析しようとする試みのものである。まず第三章「スターリン批判」と中国」では、著者は、ソ連共産党第二〇回大会における「スターリン批判」の意義を高く評価しつつ、フルシチョフ的「スターリン批判」に内在する限界を指摘したトリアッチの問題提起と対極をなすものとして、「スターリン批判」への中国の対応が存在し、かかる中国の対応の成立要因として、毛沢東路線確立の過程が、一貫して、党中央とその背後にあったスターリン指導下のコミンテルン路線への抵抗の過程であった、という歴史的経験が逆にならした、「スターリン批判」が提起した諸課題をその本質において受容す

いう、この潜在的な力を失っていたとは思われず、したがって、この点に依拠しながら自己の内部に批判を包摂することも可能であったと解決することも可能であったと思われる(二三九―二四〇ページ)と述べており、後者においては大衆を無自覚的・受動的・思考停止的な画一的な集團として把握しているのではないことは、文脈上明白であろう。したがって、前者と後者において、著者の中国大衆に対する理解の仕方は首尾一貫していないように思われる。さらに著者は、毛沢東思想とくにその軍事思想の形成に関して、幼少期に毛沢東の読んだ中国古代の伝奇小説が重要な意味を有すると繰り返して強調しているが、スノウの『中国の赤い星』のなかで毛沢東が語っているのは、「伝奇小説、とくに謀叛の故事」を愛読したということであり、著者が考えるように軍事思想の形成にまで影響を与えてはおらず、「謀叛の故事」という方向において影響を与えすぎなかったのではなからうか。(B6判、二八八ページ、五八〇頁、青木書店)

国際問題

1965 2月
No.59

特集 共産中国の現状

中国人民共和国における政治指導	衛藤 藩 吉
全国人民代表大会の成果と問題点	岡部 達 味
中国の工業水準とその問題点	蔵居 良 造
中国経済の社会主義的發展と農業	土井 章
革命傳統 その展開と問題点	平野 絢 子
中国の農村人民公社	齋藤 秋 男
共産圏と国際法(上)	天野元之助
粟餉の二筋道 追う米軍縮政策	内田久司
講座3 続・第二次世界大戦前史	岸田純之助
世界の鼓動6 公民権運動の一匹狼	斉藤 孝
	斉田 一 路

財団法人 日本国際問題研究所

国際問題新書

創刊 第1回発売

ドゴールの言葉

—その演説・声明・著書・談話から—

嬉野満洲雄編著

¥.240

アメリカの経済

—長期繁栄の戦略—

小島章・仲著

¥.220

経済統合の鼓動

—EECの成果からOPECの構想まで—

塚本政雄
安部正康 共著
荒木忠男

¥.200

多元化の国際情勢の下で、米ソの経済競争、東西貿易の進展、EEC諸国の発展、南北問題の出現に伴う後進国援助問題さらにはドル危機に始まった国際流動性の不足をめぐる改革の動き、こうした世界経済の動きの中で、史上はじめての長期繁栄をもたらす、国際収支の改善に成功し、そのバイタリティを取り戻したアメリカ経済、その若返りの秘密を本書は鋭く分析したものである。

発足以来七年の歩み続けるEEC、これに呼応して英国を中心としたEFTA、中南米地域におけるLATA等、幾多の問題点を抱えながらも着実にその地歩を固めつつある。なおその他アジア、アラブ、アフリカ各地域における経済統合への構想や努力等、今日の国際経済の動向は看過し得ぬ所である。本書はこれら世界各地の経済統合の実態と問題点を最も新しい時点で整理した。